

2022年5月1日復活節第3主日説教

エレミヤ書 32章 36-41節

使徒言行録 9章 1-19節 a

ヨハネによる福音書 21章 1-14節

復活節第3主日となり、一般の暦も5月です。国内は、ゴールデンウィークのまっただ中ですが、コロナ禍でまだ苦しい生活の中にある方々もおられます。国外では、2月に始まったウクライナでの戦いが2カ月を超え、その他の地域でも紛争が絶えません。わたしたちはこれからも、コロナ禍の終息のために、そして、世界の平和のために祈り続けたいと思います。

さて、先週の福音書は、復活したイエス様が弟子たちに現れ、三回、「あなたがたに平和があるように」と語られたお話でした。場所はエルサレムでした。本日の福音書も、「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである」(ヨハネ 31:1)とあります通り、復活したイエス様が弟子たちに現れたお話です。場所は、「ティベリアス湖畔」とありますが、これは「ガリラヤ湖」のことです。つまり、エルサレムのあるユダヤではなく、イエス様の故郷ナザレのあるガリラヤ地方です。「ヨハネによる福音書」は、このように復活したイエス様が現れたお話を、「エルサレム」と「ガリラヤ」の両方を舞台に描いているのが特徴です(マタイはガリラヤ、ルカはエルサレム、そして、マルコは復活したイエス様の姿を描いていません)。

それでは、先週のお話の中でエルサレムにいた弟子たちが、イエス様に出会い、そのあとガリラヤに移動して、再びイエス様に出会ったのかというと、そうともいえないのです。本日の個所で弟子たちは、復活のイエス様に出会って、喜びに満たされ、次の行動をはじめるといふようには描かれていないからです。むしろ、何をしようか迷っている様に描かれているのです。本日は、この不思議な部分を含んでいる、福音書のお話を中心に学びましょう。

2節で「シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた」とありますが、いたことを語るのみで、それ以上の説明はありません。そして、お話は、「シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった」(ヨハネ 21:3)と展開します。ペトロは、宣教活動ではなく、漁に行くのでした。「漁」と「ペトロ」という言葉の組み合わせから、イエス様がペトロに語った言葉「人間をとる漁師」(マルコ 1:17)を連想しますが、そのような記述は「ヨハネによる福音書」にはありません。そして、ペトロと彼に従っていく他の人々が向かうのは、魚をとる実際の漁でした。トマスやナタナエルも漁師だったのかという疑問

は、別にするとして、漁師であるペトロが漁に出ることは、ひとつの意味を持ちます。それは、もとの仕事に戻ろうとしているのかもしれないということです。ただし、「ヨハネによる福音書」は、ペトロが漁師であるとは描いていません。また漁をしているときに、イエス様から招かれて弟子になったとも描いていません。それゆえ、ペトロが元の仕事の漁に戻ろうとしたと考えることは、マタイ、マルコ、ルカのお話が前提となります。おそらくペトロがもと漁師であったことは、「ヨハネによる福音書」の時代にも自明であったと思いますが、そのように推測しなくても、ペトロは、宣教ではなく、普通の仕事に向かおうとしていたと、物語は語るのです。

漁の結果は、「**しかし、その夜は何もとれなかった**」というものでした。この記述は、少し不思議です。イエス様の時代の漁は、夜が中心であったということはありません。昼から夜まで漁をしたがとれなかったということか、魚がうまく取れない夜に漁をしたが、やはりとれなかったということでしょうか。しかし、大切なことは、その点ではなく、何もとれなかった漁からも戻りかかると「**既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった**」(ヨハネ 21:4) ということです。明け方の暗い時に、岸にいるのが誰だかわからないのは当然とも言えますが、活動をともし、またエルサレムで復活したお姿に、会ったばかりであるにもかかわらず、弟子たちはそれがイエス様だとわからなかったのです。

その後は、イエス様と弟子たちの間で、食べ物の有無、魚を取る指示(ヨハネ 21:5-6)のお話が続きます。そして、「**イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは『主だ』と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ**」(ヨハネ 21:7)と展開するのですが、この節の内容も不自然です。弟子たちの中で、イエス様が愛しておられたという表現も不思議ですし、なぜ急に彼だけイエス様だと気がついたのかも不明です。また、ペトロはイエス様に声をかけるのでもなく、湖に飛び込んでしまいます。おそらく、服を着ていない状態が失礼にあたるからでしょうが、他にやるべきことがあったのではないかと思ってしまう。そして、湖に飛び込んだペトロは、お話の流れとしてはそのままにされ、「**ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである**」(ヨハネ 21:8)と続くのです。200ペキスは、約90メートルですが、確かにこの距離では、見た人が誰であるかわかるようでわからない距離といえます。そのように暗示的に距離を示した後、お話は、「**さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった**」と続き、イエス様が炭火を起こして、食事の準備をしていたことが告げられます。しかし、イエス様は、「**今とった魚を何匹か持って来なさい**」と命じ、「**何匹か**」と言われたのにもかかわらず、ペトロは網ごと持ってしまいます。そして、魚の数は153匹、しかも

大きな魚だったと告げられます。153という数字に何か意味があるかを研究される方も多いのですが、決定的な意味は不明です（ヨハネ 21：10-11）。お話は淡々と進み、「イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」となります。「知る」という言葉は、見てわかるというような意味のごく普通の表現です。少しでもだけ表現に訳せば、「彼らは主であることを見て分かっていた」となります。さらに「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた」（ヨハネ 21：13）と続きます。この短い表現は、本日の特祷にもありますが、また四つの福音書すべてに描かれている「5千人の共食」のお話を想起させます。ただの食事ではなく、イエス様を中心にした食事です。そして、「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」（ヨハネ 21：14）とあり、お話が終わるのです。

最後にあります「弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」は、確かに、20章19-23節、と24節-29節から数えますと3度目になりますが、20章11-18節でマグダラのマリアに現れた場面は計算に入っていないようです。

さて、20章から続く、復活のイエス様と弟子たちのお話は、本日の個所のあとも続きます。それらのお話の流れは、つながっていないようでつながっている、そして、細かいところを見ると不思議なところがいっぱいある、そのような印象を受けますが、これが「ヨハネによる福音書」全体を通した特徴です。「ヨハネによる福音書」は、福音書という一つの物語ですが、全体の流れが分かりやすく整っているとはいえないのです。それは、この福音書を書いた著者が明確な執筆動機とテーマを持っているからです。先週、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」（ヨハネ 20：31）と執筆動機が明記されていることを確認しましたが、そのほかにもテーマがあります。その一つに「イエス様とは」というものがあります。この福音書には、この問いと答えがたくさんあるのです。イエス様は、もちろん、フルで？表現すれば、神の子主イエス・キリストになります。しかし、その神の子主イエス・キリストとは誰ですかという、内容的な問いが起こったときに、「ヨハネによる福音書」は、イエス様はこのような方ですと明確に答えているのです。最初の答えは、「言（ロゴス）」ですが、その答えは、特にイエス様の言葉「わたしは～である」という表現に明示されます。また、それ以外にお話の中で示され、本日の個所がそれです。イエス様とは誰かと問われれば、最初に出会った弟子たちも、見てもわからない場合もある、しかし、すぐに見てわかる方である、そのように示しているのです。

このことは、「ヨハネによる福音書」のイエス様の描き方とも関係しています。この福音書は、イエス様のご生涯と十字架の死そして復活を順番通り

に描くのですが、物語の最初から最後までイエス様は、復活の姿であるかのように描かれているのです。つまり、イエス様は、過去に誕生され、活動され、十字架で死なれた方なのですが、その物語が示すことは、イエス様とは、天地創造の初めから、今も、そして、未来、そして世の終わりまでおられる方である、ということにはほかならないのです。本日のお話でいえば、エルサレムで復活のイエス様に出会った弟子たちは、ガリラヤに戻ると、今、イエス様が見えない、おられないと思った。しかし、イエス様は、彼らの近くに、そして彼らの間に、見える場所におられたのです。すぐにはわかりませんが、気がつけば見てわかる、イエス様とはそのような方であるということです。

「ヨハネによる福音書」全体がそのように示そうとしているのは、この福音書がイエス様とは、常におられる方であること、ことに教会を通して、その存在を示す方であるということです。もちろん、この教会とは、単に建物や場所を意味しているわけではありません。主なる神様が招かれた人々の集まりという意味です。その意味では集会の方が意味に近いかもしれません。主なる神様が招かれた集会が存在する時、その中には必ずイエス様がおられるということです。先週、38年近くも歩み続けている「鶴牧集会」に初めて参加しました。一般の集会所で行われる聖書の学びの会です。教会とは言えないかもしれませんが、イエス様が共にいて下さる集会です。

本日の個所は、イエス様がいつもともにいて下さることとは、本当は、本日のお話にある通り、見て分かるぐらいの確実なことであると、21世紀に生きるわたしたちに示しています。しかし、過去の弟子たちがそうであったように、人間はそのイエス様に気がつかない、わからない場合があります。それは、イエス様がともにいて下さることが、人間的な感覚や知識や技術で確認することではなく、信仰を通して確認することであるからです。弟子たちがそうであり、この福音書を最初に読んだ読者たちもそうであったと思います。そして、今日を生きるわたしたちも同じです。これからも同じです。わたしたちは、わたしたちの教会・わたしたちのまじわりを通して、イエス様がともにおられることを確認するのです。そして、また人々に示すことが大切なのです。

イエス様の時代もそれ以前も、そして今も、世界には、様々な悲しみがあります。それらには、個人的な出来事による悲しみであり、また戦争、感染症、自然災害など、大規模な出来事による悲しみです。それら悲しみを引き超す原因を追求し、対策を考えることは重要です。しかし、それらの歩みを超えて、イエス様がともにいて下さることを信じる時、いつも悲しみを慰める希望があります。イエス様は、時間も空間も超えて、そして人と人との隔てを超えて、ことに敵味方という区分を超えて、その間に存在してくださるからです。そして、死をも超えて存在してくださるからです。そのイエス様に気付くとき、本当の平和への道が開けるのです。その平和のために、これからも教会を大切に歩み続けたいと思います。